

## Steenrod 代数と $\Lambda$ -代数

西田 吾郎 (京大, 理)

Steenrod 作用素と Dyer-Lashof 作用素は、共に対称群のホモロジー群を基として定義されるが、それらの環構造を定める Adem の関係式はみかけ上は異なっている。一方 Dyer-Lashof 代数と  $\Lambda$ -代数は本質的に同一の Adem 関係式をもつことから Singer 等により知られている。本論の目標は、対称群のホモロジーのある種の局所化と不変式論を用いることにより、Steenrod 代数と Dyer-Lashof 代数(従って  $\Lambda$ -代数)を統一的に定義できることを示すことである。本論では mod 2 の理論をあつかう。以後  $\Gamma$  ホモロジーの係数は常に標数 2 の素体  $\mathbb{F}_2$  と約束する。

### § 1. 対称群の $\Gamma$ ホモロジーと不変式

$\mathbb{F}_2$  上の  $n$  次元ベクトル空間  $\mathbb{Z}_2^n$  の線型変換群, Affine 変換群, および集合としての置換群をそれぞれ  $GL_n(\mathbb{F}_2)$ ,  $Aff(\mathbb{Z}_2^n)$  および  $\Sigma_{\mathbb{Z}_2^n}$  と表わす。また  $GL_n(\mathbb{F}_2)$  の上半三角行列全体のなす部分群を  $U_n$  とする。このとき群拡大

$$\mathbb{Z}_2^n \longrightarrow Aff(\mathbb{Z}_2^n) \xrightarrow{\pi} GL_n(\mathbb{F}_2)$$

から誘導される次の図式を考える。

$$\begin{array}{ccccc} \mathbb{Z}_2^n & \longrightarrow & \pi^{-1}(U_n) & \longrightarrow & U_n \\ | & & \cap & & \cap \\ \mathbb{Z}_2^n & \longrightarrow & \text{Aff}(\mathbb{Z}_2^n) & \longrightarrow & \text{GL}_n(\mathbb{F}_2) \end{array}$$

$U_n$  は  $\text{GL}_n(\mathbb{F}_2)$  の 2-Sylow 部分群であり,  $[\Sigma_{2^n}, \text{Aff}(\mathbb{Z}_2^n)]$  は奇数だから,  $\pi^{-1}(U_n)$  は  $\Sigma_{2^n}$  の 2-Sylow 部分群である.

従って  $\pi^{-1}(U_n) \in \Sigma_{2^n, 2}$  と表わすとき, 次の包含写像

$$\mathbb{Z}_2^n \xrightarrow{d} \Sigma_{2^n, 2} \xrightarrow{i} \Sigma_{2^n}$$

が得られ,  $N_{\Sigma_{2^n}}(\mathbb{Z}_2^n)/\mathbb{Z}_2^n \cong \text{GL}_n(\mathbb{F}_2)$ ,  $N_{\Sigma_{2^n, 2}}(\mathbb{Z}_2^n)/\mathbb{Z}_2^n \cong U$  と存る. 但し  $N_G(\cdot)$  は正規化部分群である. 従って次の可換図式が得られる.

$$(*) \quad \begin{array}{ccccc} H^*(B\Sigma_{2^n}) & \xrightarrow{i^*} & H^*(B\Sigma_{2^n, 2}) & \xrightarrow{d^*} & H^*(B\mathbb{Z}_2^n) \\ \downarrow d^* & & \downarrow d^* & & \parallel \\ \mathbb{Z}_2[t_1, \dots, t_n]^{\text{GL}_n} & \subset & \mathbb{Z}_2[t_1, \dots, t_n]^{U_n} & \subset & \mathbb{Z}_2[t_1, \dots, t_n]. \end{array}$$

ここで, 不変式の環はよく知られてゐるように  $\mathbb{Z}_2[t_1, \dots, t_n]^{\text{GL}_n} \cong \mathbb{Z}_2[g_{n,0}, \dots, g_{n,n-1}]$ , 但し  $g_{n,i}$  は Dickson 不変式で  $|g_{n,i}| = 2^n - 2^i$  である. 一方 H. Mui はよってある種の  $U_n$ -不変式  $v_i$  ( $|v_i| = 2^i$ ) が定義され,  $\mathbb{Z}_2[t_1, \dots, t_n]^{U_n} \cong \mathbb{Z}_2[v_1, \dots, v_n]$  と存ることが知られてゐる.

注意 1. 対称群  $\Sigma_{2^n}$  の  $2^n$ -次元の標準的置換表現を  $V$  とすると,  $V/\mathbb{Z}_2$  は  $\mathbb{Z}_2^n$  の regular 表現である.  $V$  の全 Stiefel

Whitney 類は

$$w(V) = 1 + \beta_{n,n-1} + \dots + \beta_{n,0}$$

で与えられる. 特に  $V-1$  の Euler 類は  $e(V-1) = \beta_{n,0}$ ,

従って  $\beta_{n,0} = \prod e(\eta_i) = \prod (t_1, \dots, t_n \text{ の } 1\text{-次式})$  である. 但し

$\eta_i$  は  $\mathbb{Z}_2^n$  のすべての非自明な 1-dim 表現を動く.

注意 2.  $\Sigma_{2^n, 2} = \mathbb{Z}_2 \wr \mathbb{Z}_2 \wr \dots \wr \mathbb{Z}_2$  に対しては

$$\begin{aligned} V|_{\Sigma_{2^n, 2}} - 1 &= \beta_1 + E(\beta_2 + E(\dots + E(\beta_n) \dots)) \\ &= \beta_1 + E(\beta_2) + E^2(\beta_3) + \dots + E^{n-1}(\beta_n) \end{aligned}$$

が成り立つ. 但し  $\beta_i$  は  $i$  番目の  $\mathbb{Z}_2$  の 1-dim 非自明表現で,

$E(\ )$  は表現の extended power である. このとき不変式

$v_i$  は Euler 類  $e(E^{-1}(\beta_i))$  で与えられる. 特に  $v_1 \dots v_n = \beta_{n,0}$

である.

定理 1. 図式 (\*) を  $\beta_{n,0}$  によって局所化するとき, 次の可換図式と同型が得られる.

$$\begin{array}{ccccc} H^*(B\Sigma_{2^n})[\beta_{n,0}^{-1}] & \xrightarrow{i^*} & H^*(B\Sigma_{2^n, 2})[\beta_{n,0}^{-1}] & \xrightarrow{d^*} & H^*(B\mathbb{Z}_2^n)[\beta_{n,0}^{-1}] \\ \cong \downarrow d^* & & \cong \downarrow d^* & & \parallel \\ \mathbb{Z}_2[\beta_{n,0}^{\pm}, \beta_{n,1}^{\pm}, \dots, \beta_{n,n-1}^{\pm}] & \subset & \mathbb{Z}_2[v_1^{\pm}, \dots, v_n^{\pm}] & \subset & \mathbb{Z}_2[t_1, \dots, t_n, \beta_{n,0}^{-1}] \end{array}$$

## § 2. 基本関係式.

$w_i = v_i / (v_1 \dots v_{i-1}) \in H^*(B\Sigma_{2^n, 2})[\beta_{n,0}^{-1}]$  とおくと, 明らかに

$H^*(B\Sigma_{2^{n,2}})[g_{n,0}^{-1}] \cong \mathbb{Z}_2[\omega_1^\pm, \dots, \omega_n^\pm]$  である.  $M^*[n] = H^*(B\Sigma_{2^{n,2}})[g_{n,0}^{-1}]$   
 $\cong \mathbb{Z}_2[\omega_1^\pm, \dots, \omega_n^\pm]$ ,  $D^*[n] = H^*(B\Sigma_{2^n})[g_{n,0}^{-1}] \cong \mathbb{Z}_2[g_{n,0}^\pm, g_{n,1}, \dots, g_{n,n-1}]$   
 とおき, 環の直和  $\bigoplus_n M^*[n]$ ,  $\bigoplus_n D^*[n]$  をそれぞれ  $M^*$ ,  $D^*$  と  
 表わす. 各  $n$  に対し

$$\psi_n: M^*[n] \longrightarrow \bigoplus M^*[k] \otimes M^*[n-k]$$

$\varepsilon \psi_n(\omega_1^{i_1} \dots \omega_n^{i_n}) = \sum (\omega_1^{i_1} \dots \omega_k^{i_k}) \otimes (\omega_1^{i_{k+1}} \dots \omega_n^{i_n})$  とおくと,  $M^*$  は  
 $\psi = \bigoplus \psi_n$  を余積とある Hopf 代数となる. このとき Dickson  
 不変式の性質から次の定理が容易に得られる.

定理 2.  $D^*$  は  $M^*$  の部分 Hopf 代数である.

次に  $M^*[n]$  の basis は  $I = (i_1, \dots, i_n)$ ,  $i_j \in \mathbb{Z}$  に対し  
 $\omega_{[n]}^I = \omega_1^{i_1} \dots \omega_n^{i_n}$  で与えられるものとし, この basis に関す  
 る dual を  $\lambda_I = \lambda_{i_1} \dots \lambda_{i_n} \in \text{Hom}(M^*[n], \mathbb{F}_2)$  と書く. また,  
 このような  $\lambda_I$  で生成される  $\text{Hom}(M^*[n], \mathbb{F}_2)$  の submodule を  
 $M_*[n]$ ,  $M_* = \bigoplus M_*[n]$  とする. 同様に,  $D^*[n]$  の basis を  $K$   
 $= (k_0, \dots, k_{n-1})$ ,  $k_0 \in \mathbb{Z}$ ,  $k_g \in \mathbb{Z}^+$  ( $g > 0$ ) に対し  $g_{[n]}^K =$   
 $g_{n,0}^{k_0} \dots g_{n,n-1}^{k_{n-1}}$  とおき,  $g_{[n]}^K$  の dual 元で生成された  $\text{Hom}(D^*[n],$   
 $\mathbb{F}_2)$  の submodule を  $D_*[n]$ ,  $D_* = \bigoplus D_*[n]$  とおく.

$M_*$ ,  $D_*$  はそれぞれ  $M^*$ ,  $D^*$  の dual Hopf 代数であり,  
 自然な射影  $\pi: M_* \rightarrow D_*$  が存在する.  $M^*$  の余積の定義か  
 ら,  $(\lambda_{i_1} \dots \lambda_{i_n}) \cdot (\lambda_{j_1} \dots \lambda_{j_m}) = \lambda_{i_1} \dots \lambda_{i_n} \lambda_{j_1} \dots \lambda_{j_m}$  は容易にわかる  
 から,  $M_*$  は symbol  $\lambda_i$ ,  $i \in \mathbb{Z}$  で生成される free

associative algebra となる.

次に加群の同型  $\delta[n]: M^*[n] \rightarrow M_+[n] \in \delta[n](\omega_{n1}^I)$   
 $= \lambda_{-1-1} = \lambda_{-i-1} \lambda_{-i-1} \cdots \lambda_{-in-1}$  と定義する.  $\delta = \bigoplus \delta[n]: M^* \rightarrow M_+$   
 とおくとき, 次の基本定理を得る.

定理 3. 次の完全列が存在する.

$$0 \rightarrow D^* \xrightarrow{\delta} M_+ \xrightarrow{\pi} D_* \rightarrow 0.$$

環  $D_*$  は自由環  $M_+$  から関係式の ideal  $\text{Ker } \pi$  によって定義されるが, 上の定理は, 関係式全体が  $D_*$  自身と同型になることを主張する. 定理の証明には次の事実を用いる.

$M^*$  の  $\alpha$  に対し,  $\psi(\alpha) = \sum \alpha_i \alpha_i'$  ならば,  $\delta(\alpha) = \sum \delta(\alpha_i) \delta(\alpha_i')$ .

従って  $\pi \circ \delta = 0$  を示すには  $\pi \circ \delta(D^*[2]) = 0$  を示せばよいが, これは直接計算で確かめられる. この事実から, 特に

$\text{Ker } \pi$  は 2項関係式 ( $\delta(D^*[2])$ ) で生成されることもわかる.

$D^*[2] = \mathbb{Z}_2[\varrho_{2,0}^\pm, \varrho_{2,1}]$ ,  $\varrho_{2,0} = \omega_1^2 \omega_2$ ,  $\varrho_{2,1} = \omega_1(\omega_1 + \omega_2)$  だから  
 $\varrho_{2,0}^a \varrho_{2,1}^b = \omega_1^{2a+b} \omega_2^a (\omega_1 + \omega_2)^b$  である. 従って  $\delta(\varrho_{2,0}^a \varrho_{2,1}^b)$  を計算

すれば 次の結果を得る.

系 4 (Adem relation).  $\text{Ker } \pi$  は次の関係式

$$\sum_i \binom{b}{i} \lambda_{-2a-2b-1+i} \lambda_{-a-1-i}$$

で生成される. ただし  $a, b \in \mathbb{Z}$ ,  $b \geq 0$ .

§ 3. Extended power と Ito-Morozumi-作用素.

前節において、対称群のコホモロジーから純代数的に環  $D_*$  を定義したが、本節では Steenrod 代数や  $\Lambda$ -代数は  $D_*$  の部分環であることを示す。

$n$  次対称群  $\Sigma_n$  の部分群  $G$  と、空間  $X$  に対し Extended power  $D_G X = (EG_+ \wedge X^{(n)})/G$  を考える。ただし  $EG$  は普通  $G$  空間、 $X^{(n)} = \underbrace{X \wedge \cdots \wedge X}_n$  である。次の写像

$$D_G X = (EG_+ \wedge X^{(n)})/G \cong (EG_+ \wedge EG_+ \wedge X^{(n)})/G \rightarrow BG_+ \wedge D_G X$$

によって  $\tilde{H}^*(D_G X)$  は  $H^*(BG)$ -加群となる。  $H^*(BG) \ni \alpha$  に対し、  $\alpha \cdot : \tilde{H}^*(D_G X) \rightarrow \tilde{H}^{*+|\alpha|}(D_G X)$  の対応を

$$\alpha : \tilde{H}_*(D_G X) \rightarrow \tilde{H}_{*-|\alpha|}(D_G X)$$

と表わし、  $\tilde{H}_*(D_G X)$  を  $H^*(BG)$ -加群と考える。

$$\Delta : BG_+ \wedge X \rightarrow D_G X$$

を対角写像  $X \rightarrow X^{(n)}$  から誘導される写像とすると

$$\Delta_* : H_*(BG) \otimes \tilde{H}_*(X) \rightarrow \tilde{H}_*(D_G X)$$

は  $H^*(BG)$ -準同型である。

次に、§1 の注意 1 で述べたように、 $\Sigma_n$  の置換表現  $V_n$  に対し Euler 類  $e_n = e(V_n|_{G-1}) \in H^{n+1}(BG)$  を考える。 $e_n$  の slant 積  $\langle e_n, \_ \rangle$  による逆系

$$\tilde{H}_*(D_G X) \xleftarrow{\langle e_n, \_ \rangle} \tilde{H}_{*+n+1}(D_G X) \xleftarrow{\langle e_n, \_ \rangle} \dots$$

を考え、その逆極限を  $\tilde{H}_*(D_G X)^\wedge$  と表わす。  $\tilde{H}_*(D_G X)^\wedge$  は明らかに  $\tilde{H}^*(D_G X)[e_n^{-1}]$  の dual である。

$\widehat{H}_*(X)$  の basis  $x_1, x_2, \dots$  を固定すると, 次の同型が存在する.

$$\widehat{H}_*(X^m) \cong \left( \bigoplus_i \mathbb{F}_2(x_i \otimes \dots \otimes x_i) \right) \oplus \text{others as } \Sigma_n\text{-module}$$

$$\text{従って } \widehat{H}_*(D_G X) \cong \bigoplus_i H_*(G; \mathbb{F}_2(x_i \otimes \dots \otimes x_i)) \oplus H_*(G; \text{others}).$$

ここで  $x_i \otimes \dots \otimes x_i \in H_0(G; \mathbb{F}_2(x_i \otimes \dots \otimes x_i)) \cong \int x_i$  と表わすと  $H_*(G; \mathbb{F}_2(x_i \otimes \dots \otimes x_i)) \cong \{ a \int x_i; a \in H_*(BG) \}$  と表わせる. このとき degree preserving 準同型

$$\phi_* : H_*(BG)^\wedge \otimes \widehat{H}_*(X) \longrightarrow \widehat{H}_*(D_G X)^\wedge$$

を  $\phi_*(a \otimes x) = (a/e_n^{|\alpha|}) \int x$  と定義する. このとき

定理 5.  $\phi_*, \Delta_* : H_*(BG)^\wedge \otimes \widehat{H}_*(X) \longrightarrow \widehat{H}_*(D_G X)^\wedge$  は共に同型である. ただし  $X$  は有限複体とする.

証明は, Euler 類  $e_n$  以上に述べた  $H_*(G; \text{others}) \in \mathbb{F}_2$  零化することから示される.

さて  $\gamma : H_*(BG)^\wedge \otimes \widehat{H}_*(X) \longrightarrow \widehat{H}_*(X)$  を次の写像の合成として定義する.

$$H_*(BG)^\wedge \otimes \widehat{H}_*(X) \xrightarrow{\phi_*} \widehat{H}_*(D_G X)^\wedge \xrightarrow{\Delta_*^{-1}} H_*(BG)^\wedge \otimes \widehat{H}_*(X) \xrightarrow{\pi \otimes 1} \widehat{H}_*(X).$$

ただし  $\pi : H_*(BG)^\wedge \rightarrow \mathbb{F}_2$  は  $1 \in H^0(BG)[e_n^{-1}]$  に対応する準同型である. また  $X = Y_+$ ,  $Y$  は無限ループ空間のとき,

Dyer-Lashof によって定義された写像  $\theta : D_G X \subset D_{2n} X \rightarrow X$

を用いて  $\gamma_\Omega : H_*(BG)^\wedge \otimes \widehat{H}_*(X) \longrightarrow \widehat{H}_*(X)$  を

$$H_*(BG)^\wedge \otimes \widehat{H}_*(X) \xrightarrow{\phi_*} \widehat{H}_*(D_G X)^\wedge \xrightarrow{P} \widehat{H}_*(D_G X) \xrightarrow{\theta_*} \widehat{H}_*(X)$$

と定義する. ただし  $p$  は自然な射影である. 定義から容易にわかるように  $H_*(BG)^\wedge \ni a$  に対し

$$\zeta_a = \zeta(a, ) : \widehat{H}_*(X) \longrightarrow \widehat{H}_{*-|a|}(X)$$

はホモロジ-作用素で dual  $\varepsilon$  とれば, 次数  $|a|$  のコホモロジ-作用素を与える. 無限  $n$ -空間の圏では, 同様に  $\zeta_\Omega(a, )$  はホモロジ-作用素である. このとき

定理 6.  $G = \mathbb{Z}_2 = \Sigma_2$  とし,  $H_i(B\mathbb{Z}_2)^\wedge$  の basis を  $e_i$ ,  $i \in \mathbb{Z}$ ,  $|e_i| = i$  とする.

i).  $\zeta(e_i, ) = (cS_g^{-i})_*$ , ただし  $i > 0$  のとき  $\zeta(e_i, ) = 0$ ,  $c$  は canonical 逆同型, また  $( )_*$  は dual  $\varepsilon$  を表わす.

ii).  $\zeta_\Omega(e_i, ) = Q^i$ , ただし  $Q^i$  は Dyer-Lashof 作用素で  $i < 0$  のとき  $\zeta_\Omega(e_i, ) = 0$ .

定理の ii) は  $Q^i$  の定義に他ならない. i) は dual  $\varepsilon$  とれば  $S_g^i$  の定義から容易にわかる.

次に  $G = \Sigma_{2^n, 2} = \mathbb{Z}_2 \int \cdots \int \mathbb{Z}_2 \subset \Sigma_{2^n}$  の場合を考える. このとき  $D_G(X) = D_{\mathbb{Z}_2} \cdots D_{\mathbb{Z}_2}(X)$  であり, 特に  $B\Sigma_{2^n, 2} = D_{\mathbb{Z}_2} \cdots D_{\mathbb{Z}_2}(S^0)$  である. また  $H_*(B\Sigma_{2^n, 2})^\wedge = \text{Hom}(H^*(B\Sigma_{2^n, 2})[q_{n,0}], \mathbb{F}_2) \subset M_*(n)$  に注意すると次の系が得られる.

系 7.  $M_*(n) \ni \lambda_{i_1} \cdots \lambda_{i_n}$  に対し

i). すべて  $k$  に対し  $i_k \leq 0$  であれば

$$\zeta(\lambda_{i_1} \cdots \lambda_{i_n}, ) = (cS_g^{-i_1})_* \cdots (cS_g^{-i_n})_* = (c(S_g^{-i_1} \cdots S_g^{-i_n}))_*.$$



ii) すべての  $k$  に対し  $i_k \leq 0$  であれば

$$\xi_{\Omega}(\lambda_{i_1} \cdots \lambda_{i_n}, ) = Q^{i_1} \cdots Q^{i_n}$$

さて  $\lambda_i, i \geq 0$  で生成された  $M_X$  の部分環を  $M_X^{\text{pos}}$ ,

また  $\lambda_i, i \leq 0$  で生成された部分環を  $M_X^{\text{neg}}$  と表わす. 上の

系より 環の 全射 準同型  $M_X^{\text{pos}} \xrightarrow{\pi_1} R$  および  $M_X^{\text{neg}} \xrightarrow{\pi_2} Q_2$

が得られる. したがって  $R$  は Dyer-Lashof 代数,  $Q_2$  は mod 2

Steenrod 代数である. 一方 定理 3 の全射  $\pi: M_X \rightarrow D_X$

を考えると 上の  $\xi_{\Omega}$  の定義から  $\pi_1(\text{Ker } \pi) =$

$\pi_2(\text{Ker } \pi) = 0$  が容易に示される. 従って環の全射

$$\pi(M_X^{\text{pos}}) \rightarrow R, \quad \pi(M_X^{\text{neg}}) \rightarrow Q_2$$

が得られる. このとき

定理 8.  $D_X$  の部分環について次が成り立つ.

i).  $\pi(M_X^{\text{pos}}) \cong \Lambda$ ,  $\Lambda$ -algebra.

ii).  $\pi(M_X^{\text{neg}}) \cong \hat{Q}_2$ , Steenrod 代数  $Q_2$  における関係

式  $S_q^0 = 1$  を除いたもの.

証明は. i) は  $\Lambda$ -代数の定義と系 4 の Adem relation を  
比べると容易にわかる. ii) は  $D_X$  における  $\lambda_0 \neq 1$  であるこ  
とと, 次元を比べることから容易にわかる.

注意.  $\pi(M_X^{\text{pos}}) \cong \Lambda$  から Dyer-Lashof 代数  $R$  を得る  
には,  $\pi(M_X^{\text{pos}})$  をさらに excess condition から定義される  
関係式で割ればよい.

注意4. 系4の Adem relation は  $\lambda_i$  の言葉で書かれて  
 いる. これを  $S_{\mathbb{Z}}^i$  で書き直せば次の通りである.

$$\sum_i \binom{b}{i} S_{\mathbb{Z}}^{2a+2b+1-i} S_{\mathbb{Z}}^{a+1+i} = 0$$

ただし  $b > 0, a \geq -1$  ある  $n$  は  $b=0, a \geq 0$ .